甲斐の金山から　平成22年1月30日　第51号

博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館報

湯之奥金山遺跡（茅小屋）に調査のメスが再び！

2010年、実に20年ぶりの新展開をご期待ください。来たる2月27日㈯には報告会を開催いたします。

（詳しくは7ページをご参照ください。）

日本における金銀鉱山遺跡～これからの金山史研究の可能性

甲斐黄金村・湯之奥金山博物館 館　長　谷口一夫
学芸員　小松美鈴

日本列島における産金の歴史は古代に遡ります。記録に残るものとしては、「続日本紀」の記事にある陸奥国守百済王敬福が、奈良時代の天平21年（西暦749年）に同国小田郡黄金迫から産出した黄金９百両を時の聖武天皇に献上、建立中の奈良東大寺大仏（慮舎那仏）の鍍金に使われたとされます。

また考古資料としては、８世紀の奈良県飛鳥池遺跡から発見の金銀細工片と坩堝があります。この遺跡は産金地でなく金銀工房跡として、当時の精錬加工技術解明につながる貴重な資料として評価される一方で、そのような金銀加工の現場が、当時すでに存在していたこと、また加工の前提となる原材料としての金銀地金の供給地があったことがあげられます。そこでその金銀産出地は何処かという課題が出てきます。仮に金は陸奥国小田郡黄金迫のものだとしても銀産出の記録がないことから、日本列島の何処かに銀の産出地を求める必要があります。石見銀山だったのか、先ずは８世紀の金銀山の見直しが迫られます。記録に残る伝承地のリストアップ、遺構が残されていれば綿密な記録が必要ですし、また文書類の存在や、もしあれば鉱山道具の集成は不可欠です。実はこの作業が乗り越えられていません。

またこの時代、産金銀地が中国大陸や朝鮮半島にあって、渡来品として地金が日本列島に来たとは、これまでの歴史研究や考古学の調査では考えられていません。では金印などでも知られるような渡来品の「鋳がえし」があったのでしょうか。福岡県志賀島発見の「倭委奴国王」金印（弥生時代）は原形で発見されています。まだ未発見の邪馬台国・卑弥呼時代の「親魏倭王」の金印などの類は宝物、時代が８世紀に下っても、そう簡単に「鋳がえし」はないでしょう。また古墳時代の副葬品に見られる金環及び馬具などは、鉄製品の表面を金箔加工したもので、量的にも満たせませんし、金地金にはなり得ません。銅鏡などの場合は、銅鐸（どうたく）説があります。

このように８世紀までの産金地の記録は「続日本紀」のみです。かつ考古学調査の事例もありません。陸奥国小田郡黄金迫に比定される宮城県涌谷の（国指定史跡）黄金山産金遺跡については、かつて黄金山神社境内の発掘調査が行われ、線刻瓦製宝珠破片の発見がありました。しかし産金に関わる道具などの出土事例はなく周辺の歴史的景観と環境からして砂金採掘の様相が強いと思われます。

平安時代の12世紀には、平泉・中尊寺に金色堂が建立されます。純金箔が張り巡らされその輝きは豪華絢爛。この時代、素晴らしい金箔加工技術が確立されていたことが分かりますが、現在、金沢に見られる金箔加工技術が、その時代からの延長線上にあるものなのか、金箔加工技術史を掘り下げる必要もあります。また、使われた金は何処からか、陸奥金山という広域的な金山が背景にあると考えられますが、その実態は不明で鉱山道具も存在しません。

13世紀の鎌倉時代には、マルコポーロは東方見聞録（復刻版は1413年に完成・国立科学博物館蔵）で、黄金の国ジパングを紹介し、さらに14～15世紀の鎌倉～室町時代のコロンブスの航海日誌（林家永吉訳「コロンブス航海誌」）には、８箇所余に「ジパング」の記述が見られます。）このことは、マルコポーロの影響を受けての「ジパング」へ航海の可能性が高いとされ、しかも、その航海でアメリカ大陸（西インド諸島）発見につながったとなれば「黄金の国ジパング」は、世界史の中に組み込まれた存在ということになります。その「ジパング」像が未だ明らかになっていません。

日本国内では仏像や蒔絵にみられる金、西陣織に見られる金糸などが、早い時期から普遍的にみることができますが、その金銀産金地については、その実態が明らかにされていません。

しかしながら昭和61年（1986）～平成元年（1989）に実施された山梨県甲州市の黒川金山総合学術調査、平成元年～平成３年（1991）に実施された山梨県身延町の湯之奥中山金山の総合学術調査は、16世紀初頭（室町時代）からの

武田氏の興亡と金山の盛衰

用途	所在地 金山名	旧下部町（身延町）					早川町			南部町	身延町	静岡市		富士宮市	旧塩山市（甲州市）					丹波山村	大月市	秋山村	北杜市		蓮崎市	川上村	茅野市	津具村	土肥町	新潟県
	道具名	中山	内山	茅小屋	常葉	栃代	川尻	保	雨畑	黒桂	十島	大城	井川	安倍	富士（麓）	黒川	竜喰	黄金沢	鈴庫	牛王院平	丹波山	大月金山	秋山金山	須玉	斑山	御座石	甲武信	金鶏	津具	土肥	黄金山
砂金（柴金）の道具	かっちゃ							○	○			○	○								○										
	かます						□																								
	背負いかご											○																	○		
	ネコザ							○	○			○	○								○								○		
	ネコ流し具																														
おもに山金の道具（＊印は砂金具と共通）	つち	◎																								◎					
	たがね	◎																								◎					
	矢																														
	釣ともし																														
	燈明皿																														
	丸木はしご																							◎							
	汰り板（盆）＊								○			○	○	○													○	◎		
	セリ板＊	○																													
	フネ	○																													
	磨り臼・磨り石	◎		◎										○		◎					◎	◎	◎				◎		◎	◎	
	挽き臼	◎	◎	◎	◎	◎	◎				◎				○	◎				◎	◎	◎	□	◎			◎	○		◎	○
	敲き石	◎																													
	搗き臼・搗き石	◎												○																	◎
	るつぼ＊	◎							○				◎			◎												○		◎
	やっとこ＊	◎																					○								
	はかり＊								○														○					○			
生活にかかわる資料	陶器	◎	◎													◎				○							◎		◎		
	磁器	◎	◎													◎				○				○					◎		
	銅銭	◎														◎															
	銅製品（生活具）	◎														◎															
	娯楽（碁石）	◎																													◎
	板碑、祠	◎	□	◎		□	□							◎		◎															◎
	一字一石経石		□											◎		◎							◎								
	鉄製鉱石粉砕具								○							◎							○					○		

（土肥、黄金山は参考）

●武田領内諸金山の鉱山道具リスト
◎＝出土品、○＝伝世品、□＝伝承あり

金山の姿を明らかにする画期的な成果がもたらされました。遺跡全体の構造から砂金に代わる初源的な山金山（金鉱石からの産金）遺跡の姿が見え、そして金山に関わった金山衆の生き様、領主との関わり、使用されていた鉱山道具・生活陶磁器類から、精錬加工技術の解明の入口まで差し掛かったのです。

その後、石見銀山では仙の山山頂部における精錬場跡が、佐渡相川金山では奉行所跡の発掘調査が実施されその成果が残されましたが、これからの課題は列島規模で、各世紀（時代）別、地域別の産金地を一定の基準で資料集成する必要があります。

「黄金の国ジパング」と言われながら、歴史的にその実態が極少数しか明らかにされていない現段階から計画的な解明に向けた研究の推進が望まれます。

そのために、各世紀（時代）別、地域別の金山の確認調査（上記の道具一覧表づくり）が先ずは必要です。遺構があれば遺構集成図、道具（砂金時代の「かっちゃ」「ねこざ」などから、山金時代の「磨り臼」、「挽き臼」など）の全国的な集成図録、「露天掘り」や「ひ押し掘り、「間掘り」跡の構造を全国一律に知ることが可能な測量図（レーザー測量など含め）作成がこれからの金銀山全容解明には不可欠なデータとなります。

当湯之奥金山博物館は、金山史研究を推進させ、成果を発信する日本の拠点的役割を果たす館として、全国の研究者との連携の中でこの研究の可能性を追求したいと考え、これからの館の学術研究課題として実践して参ります。

活　動　報　告

平成21年度公開講座　10月～

今年度の公開講座は現在開催中の平成21年度公開講座ですが、順調に回を重ねて、いよいよ２月がラストとなります。通算回62回目となった11月は「甲斐金山にみる鉱山技術」として谷口館長が、湯之奥金山の総括をお話しし、翌12月は「甲州金研究～４つの金座の消長」という演題で西脇康先生が、謎の多い甲州金について、詳細な文献資料を提示しながらお話しされました。新年１月は日本地学研究会会員の大森直之氏が「戦国大名・常陸佐竹氏の鉱山開発」という演題で、茨城の鉱山を紹介しながら、佐竹氏の歴史についてお話しされました。

２月20日は次のような内容で開催いたします。今年度ラストの公開講座となりました。多くの皆様のご聴講をお待ちしております。

第65回　平成22年２月20日㈯　日本とペルーの鉱山事情最前線　　三井金属鉱業㈱　五味　篤
場所：博物館多目的ホール【午後２時～４時（質疑応答を含む）】※聴講無料

「クリスマス！キラキラシルバー＆ゴールドアクセサリー作り体験」大盛況！ 12月13日㈰

インターンシップ研修や課外授業などを通して深く関わる山梨県立峡南高校との共催事業で、クリスマスイメージと重ねたシルバーアクセサリー作り体験を開催することが出来ました。同校では「彫金」に関わる授業で金属加工などを生徒たちが学んでおり、そうした中、学校と博物館との連携事業として実現。指導講師・スタッフとして同校の五十嵐智則先生、後（うしろ）さおり先生、電子機械科・建築インテリアコースの５人の生徒さんのご協力を頂きました。

銀地金をバーナーで溶解したものをプレス機で圧延し、模様や型紙を押して、オリジナルプレートを作り、附属させるパーツによって、ネックレスやキーホルダーなど、参加者がそれぞれに思い思いのアクセサリーを制作しました。

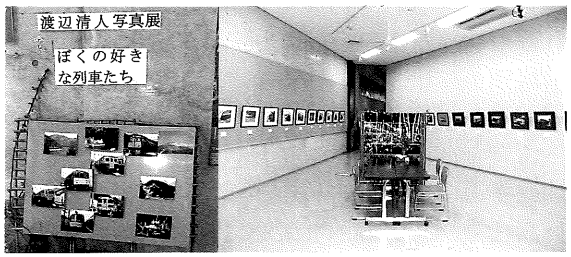
希望者にはこの純銀プレートに純金メッキを施す作業もあり、小中学生はさることながら、大人も大変楽しかったようで、また参加したいという声を多くいただきました。講師を務めてくださった五十嵐先生や後先生も「今回初めての企画でしたが、是非とも次回につなげていきたい」とおっしゃってくださっておりますので、次回のアクセサリー作り教室も是非楽しみにしてください。

特別展　渡辺きよと写真展「ぼくの好きな列車たち」写真展　10月29日㈭～11月29日㈰

紅葉の季節に合わせて多目的ホールで開催した「ぼくの好きな列車たち」写真展が、約１か月の間、ご来館いただいた皆様の目を楽しませました。

先般、同様に当館多目的ホールにて写真展を開催していただいた地元写真愛好部フォトクラブ・ペガサスのメンバーのご協力をいただき実現した写真展ですが、清人君は会期中の週末には必ず来館し、写真展を見に来たお客様に電車のお話を説明していました。静岡県の大井川鉄道などをメインに珍しい色や形の電車を中心に撮影されており「こんな電車があるんだね」「昔、うちの近所でもみかけたよ」という感想を口にしながらご覧になっているお客様が多かったようです。

清人君は、写真展を終え「自分の写真展を開くということなど滅多にないことですし、夢にも思いませんでした。改めてすごいことだと思いました。博物館の方々をはじめ、準備やアドバイスなどをくださったペガサスの皆様に厚く御礼申し上げます。」と感謝の言葉を述べていました。



伊豆方面遺跡見学会　　11月27日(金)～28日(土)

今年度の秋の遺跡見学会第２弾として、土肥金山をはじめ伊豆方面の鉱山遺跡見学会が20名の参加者が集まり、開催されました。

伊豆は、湯之奥金山と同じ操業年代の鉱山や鉱床地帯が半島を囲むようにいくつも存在する場所です。見学コースは、土肥金山を除き従来の観光コースから離れた、大仁金山跡、中外鉱業持越鉱山。清越金山、蓮台寺鉱山跡などを回りました。現地の案内として、中外鉱業が管理する持越鉱山、清越金山については、中外鉱業株式会社の湯川仁男氏、また、観光施設でもある土肥金山は経営する土肥マリン観光株式会社、天正金鉱については管理者である山田雄之氏にそれぞれの箇所の案内をいただき、また全体講師として五味篤先生をお招きし、さらに砂金・鉱物採取のスペシャリストとして伊豆方面にも詳しい大森直之さん、野村敏郎先生には仁科海岸での瑪瑙採集での講師を務めていただき、説明陣も豪華な見学会でした。

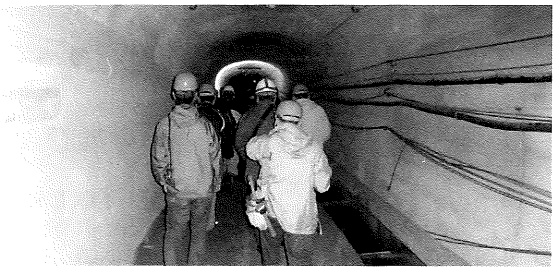
20名の参加者の皆さんには、早朝より集まっていただき、博物館からバス移動での見学会でした。出発からおよそ２時間ほどかけて最初の見学地である「大仁金山」に到着しました。

大仁金山跡は、伊豆温泉村・百笑の湯の駐車場付近にあり、山の斜面を利用し上から順番に精錬作業を効率よく行える作りになっており、

湯川氏（写真中央）より説明を頂きました。

壁しか残っていないとはいえ、その規模の大きさと、またつい最近まで人家の近くでこれだけ大規模な金山が操業されていたことに驚かされました。

次の見学地、持越・清越金山では、ここを管理する中外鉱業株式会社の湯川仁男さんに施設内を案内していただきました。持越鉱山は、広大な敷地内に昭和に操業していた木造の建物がそのまま残っており近代の産業遺産ともいえる外観で、施設の作りは、大仁金山と同様、斜面を利用し上から順番に鉱石を精錬していく作りでしたが、普段は立入禁止になっているこの施設内を、特別に見学させていただきました。施設内には、電気の配電盤の跡や、大きな動力機器、消火設備などがまだ残されており、湯川さんのお話では、最盛期には、学校や病院、娯楽施設などもあり一つの鉱山町が存在していたそうで往時の様子を伺うことが出来ました。時代は違えども、同じような最盛期の光景が湯之奥金山にも間違いなくあったはずで、そんな様子を重ねながら、改めて持越鉱山の光景に、少し感慨深いものを覚えずにはいられませんでした。



引き続き「清越鉱山」までバス移動しましたが、「清越鉱山」では、博物館友の会会員で伊豆在住の水口為和さんと合流しました。水口さんはかつて中外鉱業株式会社に勤めていらっしゃったということで、湯川さんと共に詳しい説明を頂くことができました。

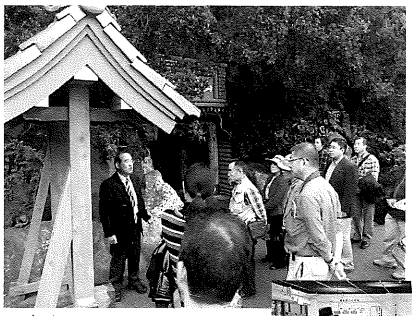
この清越金山も中外鉱業が管理しており普段は見ることが出来ませんが、特別に坑道内を見学させていただきました。坑道は近代の作りのため、人が通れる大きさの穴が一直線に掘られており中には作業機器もそのまま残されており、つい最近まで金を掘っていた様子が伺えました。湯川さん、水口さんの案内で入口から300メートル程の場所まで進みました。坑道内には水路が作られ今も大量の水が出ており、この水が土肥の水道水として利用されているということでした。

ちなみに、坑道内には蝙蝠が沢山いました。富士山でネイチャーガイドをされているという参加者のおひとり、外川さんによると、坑道の中には３種類の蝙蝠がいたそうですが、30センチほどの近距離で蝙蝠を見るという体験もなかなかないことです。

見学後、事務所前で全員で記念撮影を行い、湯川さんとお別れし、次の見学地である土肥金山へ移動しました。

「土肥金山」では土肥マリン観光の安福社長さんや浅賀課長さんらが我々をお迎えくださいました。

昼食後、土肥マリン観光の浅賀さんのご案内で観光坑道、黄金館を見学しました。坑道内には等身大の人形や様々な展示物が用意され、見る人を飽きさせない工夫がされています。黄金館では、金鉱石、石臼、金を精錬する過程など金にまつわる様々な物が展示され、また、世界最大の250kgの金塊や金の延べ棒を直に触れるコーナーなど、金についての遊び心が豊富にちりばめられた展示でした。参加者の皆さんも金塊に触れてみたり、持ってみたりと楽しんでいました。

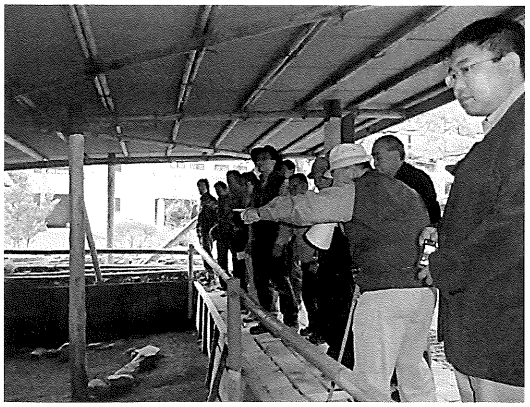


ご説明くださる
浅賀課長さん

土肥金山では見学ももちろん砂金採り体験も夢中になりました。

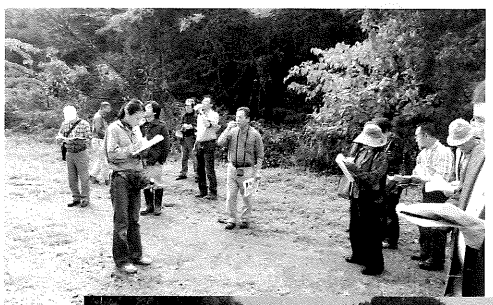
別館の「砂金館」では、砂金掘り体験です。女性スタッフが砂金掘りを指導してくれましたが、お客さんとしてですとまた意気込みが違います。スタッフも参加者も奮闘の30分間でした。体験を終えて、ご案内いただいた浅賀さんと一緒に記念写真を撮り土肥金山を後にしました。金山博物館と共通点の多い土肥金山と今後も交流を深める中でお互いに学び合えれば、いろんな可能性が広がるのではと感じました。

続いて、土肥金山から３分と程近い「龕付天正金鉱」を訪れ、ご案内の山田さんが出迎えてくれました。天正金鉱は、自然のままで残しているため、本来の坑道の姿を見ることができる数少ない場所です。山田さんのご案内のもと、「釜屋敷」といわれる精錬遺構から見学をし、随所に展示されたミニチュア模型を見学しながら坑道を目指し山道を進みました。「柿木間歩」という坑道には、人が一人通行できる穴が続いていました。さらに途中から階段状に下へ向かっている構造で、表面も比較的平らになっており、手掘りでこれだけの穴をどうやって掘ったのか、当時の技術力の高さに驚きを覚えました。最深部の龕に到着し、その後、来た時と違うルートを進み坑道の外へ出ました。約50分の見学を終え、山田氏と記念撮影をし、また道中同行してくださった水口さんともここでお別れし、「天正金鉱」を後にしました。天正から宿へ向かう道すがらの「黄金崎の鉱床帯」を車内説明しながら１日目のすべての見学を終えました。

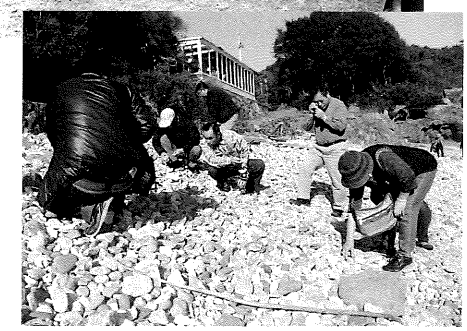


釜屋敷の状況をご説明くださる山田氏

２日目は朝８時30分には旅館を出発し、全体講師の五味先生に車中説明をいただきながらのスタートとなりました。２日目最初の見学地「仁科海岸」では、野村先生に瑪瑙鉱石の見つけ方をご説明していただき、鉱石拾いを開始しました。何か見つけると、野村先生や五味先生、大森さんに検品してもらい、皆、きれいな瑪瑙を拾うことが出来、とても楽しそうな雰囲気でした。「仁科海岸」を20分程度で出発し、次の見学地「蓮台寺（河津）鉱山」を目指しました。蓮台寺鉱山では、伊豆の鉱山を含めて丁寧にいろいろとご説明いただき、皆さんは熱心に耳を傾けていました。



五味先生（中央）の解説を頂きました。



菖蒲沢での金鉱石拾い。

「蓮台寺鉱山」の見学を終え、昼食後、最後の見学地である「菖蒲沢海岸」へ向かいます。ここでは大森さんに金鉱石の見分け方など簡単に説明をしていただき、鉱石拾いを開始。一生懸命鉱石を探し、波打ち際で水にぬれてしまう一幕も。ゆっくりと金鉱石拾いをし、「菖蒲沢海岸」を出発しました。

１泊２日の全ての遺跡見学を終了し、一路博物館へ。参加者の皆さんも大変ご満足いただき、内容の濃い見学会となりました。参加してくださった皆さんが「以前よりも良かった」と言っていただけるようなものを次回も計画していきたいと思います。

館からお知らせ①

湯之奥金山遺跡【茅小屋・内山】測量調査 中間報告発表会　開催！

湯之奥３金山のうち、「中山金山遺跡」は平成元年度から３年間の総合学術調査によって、平成９年に国指定史跡に指定され、残りの茅小屋・内山の２金山は、その後未調査でしたが、昨年、茅小屋金山遺跡の測量調査実施という大きな進展を見せました。

これまでの報告よりもさらに詳細な茅小屋金山遺跡の現状と様子が測量調査の結果、明らかとなり、多くの皆様に知っていただくための中間報告会を開催いたします。金山遺跡調査は、地域の歴史資源を活用した社会教育事業の推進と観光客との交流事業の充実を図るためにも重要な位置づけにあります。**今年から来年にかけての湯之奥金山（茅小屋・内山）遺跡の測量調査に中間報告とその後の展開、そして、昨年度行った中山金山遺跡の坑内ロボット調査の結果発表とその可能性の発表会です。**

どなた様でもご興味のある方は、お申込のうえお気軽にご来館ください。

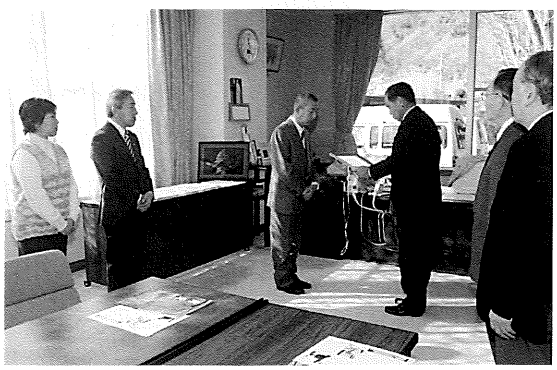
期　　日：平成22年２月27日(土)
場　　所：湯之奥金山博物館 映像シアター（■定員：先着85名　※定員になり次第締め切ります）
時　　間：午後１時～午後５時
プログラム：①湯之奥金山遺跡の歴史的概要について（湯之奥金山博物館館長　谷口一夫）
②茅小屋金山遺跡測量調査報告（テクノプランニング測量技師　柴田直樹氏）
③坑道内映像と共に中山金山のすごさを語ろう！ ロボットを用いた中山金山遺跡坑道内調査報告
（久間英樹氏・島根県松江工業高等専門学校電子制御工学科教授・博士（工学））
④パネルディスカッション「湯之奥金山遺跡の今後の可能性について」

■参加無料【お申し込み・お問い合わせは当館（☎0556-36-0015）まで】

「奥山コレクション」が身延町文化財に指定されました！

奥山コレクションは、笛吹市春日居町の故奥山源栄氏の祖父・父２代に亘り収集されてきたもので、古甲州金・新甲州金・江戸幕府の金貨（大判・小判）が揃っており、湯之奥金山博物館における常設展示室において、常時公開され、当館のメイン展示としてご来館の皆様に甲州金の歴史を伝えている貴重な歴史資料です。奥山家に代々伝わってきたこのコレクションは、源栄氏が、萬亀子夫人とともに戦中戦後を通じ、また生涯を通じ、散逸しないように守り抜いてこられたものでしたが「家にしまっておくよりも多くの方々に見ていただき、学術研究に役立てていただきたい」という源栄氏とご家族のご意向から、一昨年、江戸時代の大判小判を含む全91点を身延町に一括寄贈されました。

その功績に対する紺綬褒章の遺族追賞が、去る１月８日、萬亀子夫人に贈られることとなり、この伝達式が身延町役場・町長室に於いて執り行われました。当日は長男の奥山源太郎さん、次男の奥山次郎さん、長女の若月美智子さんが同席される中、望月仁司身延町長より、褒賞状と木杯一式が源太郎さんに伝達されました。



末永く研究教材として、また観光資源として活用されることになりましたが、故奥山源栄さん、萬亀子夫人はじめ、ご家族の皆様のご理解に御礼を申上げると共に、ご遺志を尊重し責任をもって保管・活用して参ります。

なお、奥山家コレクションの91点を含む、湯之奥金山所有金貨107点は、平成21年11月30日、身延町指定有形文化財に指定されましたが、今後、甲州金貨などの研究が進む中で、上位の文化財指定を視野に入れて参りたいと思います。

館からお知らせ②

○親子映画観賞会　期日：平成22年３月24日㈬ 午後１時～（午後12時30分開場・於映像シアター）
※上映作品は決定し次第、配布チラシ・HPなどでお知らせ致します。　観賞無料

湯之奥金山博物館　日曜コンサート

期　日：平成22年３月28日㈰：午後１時30分～２時30分
場　所：湯之奥金山博物館 多目的ホール～エントランス
演　奏：南アルプス市桃源交響楽団の皆さん　　※入場無料

春の訪れを感じさせる素敵な演奏を博物館へ聞きにきてください。
いずれの事業も、参加ご希望の方は博物館までご連絡ください。

◎開館時間：午前９時～午後５時まで（受付は閉館30分前まで。）
◎桜観期無休開館です：平成22年３月18日㈭～４月13日㈫までの約１か月間、身延山のしだれ桜の開花に合わせて、無休開館いたします。桜を眺めながら温泉郷の散策というプランでお出かけください。

博物館日誌（平成21年10月～１月）

10月
1日㈭ 冬時間
3日㈯ 第61回公開講座・笹本正治先生
5日㈪ ワーキンググループ会議
6日㈫ 五味先生講演会
7日㈬ FM-FUJI出演
8日㈭ 休館日
9日㈮ ワーキンググループ会議
下部小4年生校外学習
湯田小5年生県内巡り
14日㈬ 日野春小5・6年生校外学習
16日㈮ 休館日
17日㈯ 北杜泉小4年生県内巡り
20日㈫ 身延線沿線物産まつり
21日㈬ 巡回展「山梨の遺跡展2009」終了（9月29日～）
23日㈮ 休館日・空調メンテナンス（身延総合設備）
25日㈰ 豊岡小3年生町内巡り
28日㈬ 身延町議会議員選挙投票日
29日㈭ 休館日

11月
4日㈬ 第12回特別展「渡辺清人写真展～ぼくの好きな列車たち」初日（～11月29日㈰）
7日㈯ 親子映画観賞会「ブタがいた教室」
10日㈫ 平成南部藩一日国替え事業（二戸市長来館）
11日㈬ 休館日
12日㈭ 日野出高校校外学習
14日㈯ 第62回公開講座・谷口一夫館長
18日㈬ 身延山大学研修
20日㈮ 休館日
22日㈰ 県民の日（観覧無料開放日）
23日㈪ テレビ朝日「いきなり！黄金伝説。」取材・撮影
25日㈬ 山梨日日新聞取材
26日㈭ 休館日
27日㈮ ほんわかした灯りのイベント点灯式（～平成22年２月28日㈰）
30日㈪ 2009秋の遺跡見学会（～28日㈯）
ションが身延町有形文化財に指定

12月
1日㈫ 朝日新聞取材
2日㈬ 下水道工事に伴う駐車場への車両通行止め（～12月22日）
3日㈭ ワーキンググループ会議
9日㈬ 休館日
12日㈯ 親子映画観賞会「アルビン　歌うシマリス3兄弟」
13日㈰ シルバー&ゴールドアクセサリー作り体験
16日㈬ 休館日
17日㈭ 「いきなり！黄金伝説。」放送（11月22日撮影）
18日㈮ テレビ東京撮影
19日㈯ 第63回公開講座・西脇康先生
21日㈪ 身延山大学研修
22日㈫ 防災センター設備点検
23日㈬ 魅力づくり協議会・県との意見交換会
24日㈭ 臨時開館日
27日㈰ 沖縄・八重瀬町交流団来館
28日㈪ 振替休館日
28日㈪ 年内最終開館日
28日㈪ 年末休館日（～平成22年１月１日）

1月
2日㈯ 年始開館初日
6日㈬ 休館日
7日㈭ テレビ東京撮影
8日㈮ 奥山家族追賞伝達式
13日㈬ 休館日・電気点検メンテナンス
19日㈫ 山梨日日新聞取材
20日㈬ 休館日
22日㈮ 身延小3年生町内巡り

編集後記

“大寒波”といわれているこの冬。日中の気温が上がらず、毎日寒いなあと思う日々が続いています。ここ数年、暖冬が続いていましたから、もしかしたら体が忘れてしまっただけで、ほんの温暖化と言われる一昔前まではこれくらいの寒さが当たり前でこれが“日本の冬”だったような気もします。

さて、夕方５時というと真っ暗だったのが日もずいぶんと長くなりましたが、リバーサイドパークのイルミネーションは２月末日までご覧いただけます。夜は当然真っ暗なこの辺りですから、光が映えて綺麗ですよ。改めてこの一年も頑張れるよう気を引き締めていきましょう。

博物館だより　第51号　平成22年１月30日
〒409-2947　山梨県南巨摩郡身延町上之平1787番地先　甲斐黄金村・湯之奥金山博物館　電話 0556-36-0015　FAX 0556-36-0003
博物館HPアドレス http://www.town.minobu.lg.jp/local_minobu/kinzan/index.html　博物館Eメールアドレス yunoking@town.minobu.lg.jp